

---

## 発展学習01-3 世界仮説

---

「世界仮説」というのはアメリカの哲学者 Stephen C. Pepper (April 29, 1891 – May 1, 1972) が 1942 年に刊行した、

*World Hypotheses: a study in evidence.*

という本 (also known as World Hypotheses: Prolegomena to systematic philosophy and a complete survey of metaphysics) で主張された考え方です。ウィキペディアでは英語版のみ説明記事があります。「世界仮説」で検索しても、あまり大したコンテンツはヒットしません。「公正世界仮説」は全く無関係です。

この主張は、1980 年代以降、Hayes, Hayes & Reese (1988) \*1 らによって取り上げられ、その後の関係フレーム理論 (RFT) やアクセプタンス&コミットメント・セラピー (ACT) の機能的文脈主義の考え方を特徴づけるツールとしてしばしば引用されるようになりました。

日本語文献では、

武藤崇 (2001). 行動分析学と「質的分析」(現状の課題). 立命館人間科学研究, 2, 33-42.

武藤崇(編). (2006). アクセプタンス&コミットメント・セラピーの文脈。臨床行動分析におけるマインドフルな展開。ブレーン出版。

武藤崇(編) (2011). ACT (アクセプタンス&コミットメント・セラピー) ハンドブック 臨床行動分析によるマインドフルなアプローチ. 星和書店。

で解説されています。このうち 2006 年の書籍は絶版となり、2011 年は出版社を変えたほぼ同一内容の書籍となっています。また、武藤(2001)の論文は無料で閲覧可能となりますので、とりあえず、それを読まれるとよろしいでしょう。

さて、私たちは、身の回りに存在する事象を比喩的に利用して世界観を構成します。じっさい、今まで一度も見たことも聞いたことも無い現象に遭遇した時には、それを具体的に他者に伝えることはできません。「喩えようがない」というのはこのことです。相手が

---

\*1 Hayes, S.C., Hayes, L.J., & Reese, H.W. (1988). Finding the philosophical core: A review of Stephen C. Pepper's World Hypotheses: A Study in Evidence. *Journal of the Experimental Analysis of Behavior*, 50, 97-111.

全く知らない現象を伝えようとする時には、相手の知っている事物・出来事に「喩えて」説明せざるをえません。難解な宇宙理論、数学理論、原子物理学の理論なども、日常の事物に喩えて説明されています。宗教が描く神さま、天国や地獄も人間の姿や人間が見聞きしている世界に喩えて説明されています。世界観も同様で、人間世界の喩えを使わずに説明することは困難でしょう。(以下は、武藤(2011)の要約です。)

Pepperはこの点に関して次のような格率を提唱しています。

- ・ある世界仮説はそのルート・メタファーによって規定されている
  - ・各世界観は自律(*autonomous*)している
  - ・各世界観同士の折衷は混乱を引き起こす
  - ・ルート・メタファーとの関係を失っている概念は意味を持ちえない(*empty abstractions*)
- この格率からさらに次のような主張が生まれます。

(1)ある世界仮説を用いて他の世界仮説を分析・批判することは、上述の前提条件から逸脱するだけでなく、本質的に無益である。

(2)他の世界仮説の欠点を暴くことで強められる世界仮説はどこにも存在しない。

(3)科学や哲学に共通にみられる4つの基本的な比喩として

- ・類似性(*similarity*)
- ・有機体(*organism*)
- ・機械(*machine*)
- ・文脈内の行為(*action in a context*)

の4つが抽出される。

上記の(1)や(2)は、心理学の論争でも重要な意味を持ちます。心理学理論Aと心理学理論B(例えば認知主義と徹底的行動主義)が異なるルート・メタファーによって規定されているとするなら、一方の前提に基づいて他方を批判しても本質的には無益ということになります。またそういう批判をしても、自分の立場が強められることはありません。なので、心理学の学会で何らかの論争をする時には、ルート・メタファーが同じか違うかに配慮する必要があります。

Pepperはさらに世界観を2つの基準で2×2の4通りに分類しています。2つの基準とは、

a)世界は「要素」で構成されているか

b)世界を1つの「ストーリー」として語ることが可能か

であり、a)、b)それぞれに当てはまれば○、当てはまらなければ×で示すと、

- ・形相的世界観(*formism*:形相主義) ○ ×
- ・有機体的世界観(*organicism*:有機体主義) × ○
- ・機械的世界観(*mechanism*:機械主義) ○ ○
- ・文脈的世界観(*contextualism*:文脈主義) × ×

と分類されます。またそれぞれのルート・メタファー(【 】内)と真理基準は、

形相主義 【類似性】言語構成体と事実との単なる一致 類似性

有機体主義 【生命を有し、成長する有機体】ある結論を導くような諸事実の首尾一貫性

機械主義 【機械】 言語構成体とその構成体によって示唆される新事実との一致  
文脈主義 【文脈中に生じている、進行中の行為】 恣意的なゴールの達成

となります。

武藤(2001 ; 2011) によると、それぞれに該当する哲学は、

形相主義 : *Plato, Aristotle*

有機体主義 : *Schelling, Hegel*

機械主義 : *Democritus, Descartes, Locke*

文脈主義 : *James, Mead, Dewey*

となり、心理学の場合は、

形相主義 : *Kretchmer, Sheldon* の人格類型理論

有機体主義 : *Maslow* の自己実現理論、*Piaget* の発達理論

機械主義 : *Hull* や *Tolman* の行動理論、*Neisser* の認知理論

文脈主義 : *Gibson* の知覚理論、*Gergen* の社会心理学理論

ちなみに、スキナーの徹底的行動主義は、特に初期の著作には機械主義と文脈主義が混在していると指摘されていますが、全体としては文脈主義の特色を有すると結論されていると指摘されています。

ここで重要な点は第一に、文脈主義と機械主義の違いです。文脈主義は、究極的な真理は存在せず、認識者と被認識者という二分法もなく、因果律も実在しないと捉えるため、認識すること自体を否定しなければならなくなってしまう。それを克服するためには「ある恣意的なゴールが設定される場合にのみ認識の可能性が生じる」と捉えることです。関係フレーム理論の基礎研究では、実験的分析に基づく証拠集めが行われていますが、それは、機械主義と異なり、文脈主義の「事象に対する予測と影響」(prediction and influence) という「ゴールを達成する」という実用的な発想から、機械主義的な理論を採用しているにすぎません。ですので、絶対的普遍的真理の発見をめざすといったようなものではなく、あくまでもそのゴール達成のための手段にすぎない、ということに留意する必要があります。

第二に、記述的文脈主義と機能的文脈主義の違いです。前者は歴史家、後者は技術者に喩えられています。また機能的文脈主義の方が機械主義や記述的文脈主義より適切である、と主張しているわけではありません。臨床的応用場面で言えば、機能的文脈主義という立場が正しいと主張しているのではなく、「従来の行動療法をより進展させる」というゴールを達成するために選択しているということになります。

第三、これは各所で論じられていることですが、徹底的行動主義と方法論的行動主義の区別はきわめて重要です。とりわけ、徹底的行動主義は私的出来事を扱うという点はしっかり抑えておく必要があります。

このほか、

【客観性とは】完全に対象と独立した観察的視点も存在しないと捉える。つまり、客観性とは、科学者とその対象との距離を常時正確に把握し、科学者からの過度な干渉を及ぼさないように、あるいは対象の属性に問題を還元しないようにするための倫理的スタンスである。

【因果律とは】「予測と影響」を可能にするための効率的な言語ユニットのこと

「if … then …」という「独立変数—従属変数」で表される関数関係は、研究者の具体的なアクションとそれによる対象への影響を表記する最善なユニットなのである

【データとは】選択したゴールを達成することに全く関係しないようなデータは、いくら数値化（量的）されたものであっても全く意味を持たず、逆に、そのゴール達成に有用なら、記述的（質的）データであっても意味を持つ

といった点も抑えておくとよいでしょう。

以上はあくまで武藤(2011)の要約です。詳しくは当該の論文・書籍をお読みください。なお最近の議論としては、

Dymond, S., & Roche, B (Eds.), (2013). *Advances in relational frame theory: Research and application*. Oakland, CA: New Harbinger.

という書籍に、

第1章 : Hayes, S.C., & Long, D.M. (2013). Contextual Behavioral Science, Evolution, and Scientific Epistemology.

第2章 : Wilson, K.G., Whiteman, K., & Bordieri, M. (2013). The Pragmatic Truth Criterion and Values in Contextual Behavioral Science.

があり、機能的文脈主義をめぐる議論が総括されています。